

島民イメージを覆すインテリ女性像

ー 1940年代の南洋表象と中島敦「マリヤン」(1942) ー

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター 研究員 陳 佳 敏

はじめに 1940年代における島民イメージと中島敦「マリヤン」(1942)

1941年6月から翌年3月まで中島敦は、南洋庁内務部地方課国語編集書記として南洋群島に赴任した。帰国後、彼はこの南洋滞在をもとに作品集『南島譚』¹ (1942、今日の問題社) を執筆した。「マリヤン」はその中の1編である。

当時の南洋では、「我々の任務は、島民の福祉を増進することにある。(中略) 1日も早く、人種的、民族的差別が消滅し、混然融和した同じ国民となることを希望する²」というように同化政策が推し進められていた。そして、現地住民の幸福を増進するためには、日本語教育と道德教育が強調され³、「教育こそが現地住民を従順な忠誠心のある人間に育てるための手段」だと考えられていた。つまり、教育を施すことによって、日本精神を教え、従順たる島民を育ち、彼らを幸福にしてやるという方針だった。

1920年、当時文部省の図書監修官だった高木市之助は、「トラック島便り」という植民地教材を執筆し、それを国定の尋常小学校国語読本の巻九に採用した。次の文は当時の日本が早くから「大人しく」て従順な「土人」のイメージ

を子供たちに植え付けさせていたことを端的に物語っている。

土人はまだよく開けていませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、(略) 子供などはなかなか上手に日本語を話します。この間も十ぐらいの少女が「君が代」を歌っていました⁴。

同様の島民イメージは、南洋を訪れた多くの知識人たちも持っていた。矢内原忠雄は『南洋群島の研究』(1935)の中で、「現今にても若し労働の環境に置かれる時には、彼らは従順にして勤勉なる労働能力の所有者たること⁵」と島民の性質の従順さを指摘している。また、旅行者として南洋群島に訪れた児童文学者の久保喬は、その著『南洋旅行』(1941)の中で「日の丸旗が空に挙げられて、その下で君が代を歌う、島民の子供たちを見ますと、何か強い感動が胸の中に湧いてくるのを覚え⁶」ると指摘し、同書の「ココホレ ワンワン」の節では、「島民たちの中にも、もうこれほど、日本のものが溶け込んでいるのだということを、感じないでいられませんでした⁷」と述べている。

このように、当時、南洋を訪れた知識人たちは、島民たちが如何に親切でおとなしい人なのかを様々な文章を通して紹介していた。

では、中島敦はどうであったのか。島民の子

1 この作品集は「環礁」と「南島譚」に分かれ、さらに「環礁」には、中島敦自身が現地での体験をもとに創作した「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」計6編の短編が収録されている。また「南島譚」には、南洋の民話や風習を物語化する「幸福」「夫婦」「雞」の3編が収録されている。

2 松岡静雄『ミクロネシア民族誌』(岩波書店、1943)。

3 荒井利子『日本を愛した植民地 南洋パラオの真実』(新潮新書、2015) 131頁。

4 川村湊『南洋・樺太の日本文学』(筑摩書房、1994) 26-27頁。

5 矢内原忠雄『南洋群島の研究』(岩波書店、1935) 15頁。

6 久保喬『南洋旅行』(金の星社、1941) 48-49頁。

7 同上、274頁。

供たちが使う教科書を編纂するために南洋に出かけた8ヶ月の間、中島敦は1941年9月中旬から11月の始め、そして11月中旬から12月中旬の2回、約3ヶ月間、視察旅行としてトラック諸島、ボナペ島、クサイ島、ヤルート島、ヤップ島、ロタ島、テニアン島、サイパンなどを渡り歩いている。その際、彼は島々にある公学校（島民学校）、国民学校（日本人学校）を見学し、授業参観をしている。それだけではなく、各島の校長や支庁の官吏など長年南洋に滞在する日本人にも招待され、彼ら南洋に関する話を聞かされるとともに、島に案内され、島民部落に連れていかれた。それ故に中島敦は近距離で島民の姿を観察し、彼らの歌声を聞き、踊りを見て、彼らと直に会話することができたのである。何よりも、南洋滞在中に民俗学者の土方久功と出会い、間もなく彼と親しくなったことだ。中島敦は、毎日のように土方久功の宿舎に訪れ、やがて彼の日記・草稿を読むことを許されるようになった。

中島敦は、島で体験したことを書簡や日記の中で書いている。彼は「僕が生徒を捉まえて話しかけても、向こうはコチコチで、「ハイ、***で、あります」」と大人しく返事するのみで、「がっかりする」⁸心情を妻たかに吐露し、また日本語の発音ができない生徒に対して、「何時迄も立たされて練習しつゝあり⁹」、怒鳴りつく校長の酷烈な生徒扱いに驚き、さらに「帽子を脱ぐにも1、2、と号令を掛けしむる」様子に対して、「如何なる趣味にや¹⁰」と書いている。中島敦は島民の子供たちの性質を無視して、強制的に日本文化を押し付け、大人しく改め直す教育に疑問を覚えていたのである。

また彼は、エッセイ「章魚木」（1942月3

月）の中で、パラオ本島北部の島民部落の章魚木と日本人町に通じる道で見た章魚木との比較を次のように描かれている。

既に蒼茫と暮れかかった坂道の両側に、葉をおどろと振り乱したたこの木どもが、モモンガアとでも言いたげに私たちを威すが如き風情であつた。生くさい坊主のような狡そうな奴や、寒山拾得みたいな飄逸な奴や、今にもアカンベエをして見せそうな奴や、後ろを向いて舌でも出しかねない奴や、（中略）どれを見ても全く一本一本に個性が躍動しているようだ。（中略）数日後、アイミリーキから瑞穂村への道で私はまたたこの木の群を見た。（中略）個々のたこの木達は、声を揃えて大人しくコンニチハと頭を下げそうな、よくしつけられた優等生ばかりである。飼い慣らされた檻の中の猛獣を見る時のような気味無さを私は感じた¹¹。（下線は筆者）

中島敦が南洋で出会った島民は、ステレオタイプ化した極めておとなしい個性のない「たこの木」で表象された人間ではなく、「個性が躍動している」存在であった。そして、この「個性が躍動している」「たこの木」が、まさに帰国後に書き上げられた『南島譚』の中に出てきたナポレオン、夾竹桃の家の女、マルクーブ老人などの南洋の人々他ならない。中島敦は作品を通して表現しようとする島民の姿は、「よくしつけられた優等生」ではなく、それぞれ自分なりの世界を持ち、意地を持つ豊かな人間なのである。「マリヤン」に登場する島民女も、このような存在である。

これまで「マリヤン」に関する先行研究では、マリヤン像を文明統治の犠牲者や脱植民地

8 1941年12月2日付妻たか宛書簡。中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2001）648頁。

9 1941年11月28日付日記。中島敦、前掲書（註8）484頁。

10 同上。

11 中島敦「章魚木」『中島敦全集2』（筑摩書房、2001）20-21頁。

主義思想の象徴として論じられている。山下真史は「この作品から浮かび上がってくるのは、植民地政策の犠牲者とも言えるマリヤンの痛みである¹²⁾」と述べている。また、閻瑜は「マリヤンは植民地の統治者の目から見ると南洋政策の成功例であるが、「私」の目の中には犠牲者といえよう¹³⁾」と主張している。さらに、須藤直人はマリヤンが「ロティの結婚」に不満を漏らし、内地人との結婚を拒否する描写を通して、中島敦の「半植民地主義」「脱植民地化」を表現した¹⁴⁾と論じている。

日本の植民地支配によって日本語教育を受け、また日本に留学した経験があるインテリであるが故に南洋の生活環境とは釣り合わず、また不幸な結婚生活を辿らなければならなかったということを考慮すると、確かに植民地政策の犠牲者である。しかし、筆者がここで注目したのは、マリヤンが積極的に植民地側に立ち、必死に内地人になろうとすることである。なぜ中島敦は彼女のような女性を主人公にし、観察したのであろうか。

以上を踏まえ、本論では「マリヤン」に登場する島民女マリヤンを分析することによって、当時日本社会に広まったステレオタイプの島民像を改めたい。

1. 「マリヤン」のあらすじとそのモデル

まず、「マリヤン」のあらすじから紹介することにする。「マリヤン」はパラオに生きる島民女性マリヤンを主人公にした物語である。マリヤンはコロール島第一名家の出身で、東京の女学校にも勉強したことがあり、英語も日本語

も堪能なインテリである。彼女は＜土俗学者H氏＞のパラオ語の先生である。H氏は十数年以上南洋に住み、地方の伝説、昔話の類を集め、それを邦訳している。そして、彼女は週に三回H氏の部屋に来てその手伝いをする。パラオ役所に勤務する＜私＞は、唯一の話し相手である＜土俗学者H氏＞の部屋によく出入りしていたがために、マリヤンと知り合った。＜私＞はH氏の部屋で彼女のパラオ料理をご馳走になることもしばしばあり、また彼女の盛装姿や労働奉仕するときの姿を見たこともあり、H氏と一緒に彼女の家に訪問したり、大晦日の日で散歩に出かけたりするなど彼女との交際を深めていく。しかし、結局H氏も＜私＞も個々の事情で内地に帰るところで小説は終わる。

上述したあらすじからも窺えるように、これは一般的な文学作品というより、事件もクライマックスもなく、ただ単に語り手の＜私＞が淡々とH氏、マリヤンとの交流の中で彼女を観察するものである。しかも、＜私＞の観察するマリヤンにはモデルがいる。

そのモデルは、土方久功と親しく交流していたカナカ人女性マリヤである。マリヤは1940年1月28日の土方久功の日記に登場していることから、土方とは前からの知り合いであったと言えよう¹⁵⁾。作中に登場する＜土俗学者H氏＞が、土方久功をモデルにしていることは、ほぼ定説となっている。モデルのマリヤは、上田淳一郎と河路由佳の实地調査によって明らかになっている。上田淳一郎は「マリヤンはコロール島の王女と言われ、確かに酋長の娘であり、勉強家のインテリでもある。彼女は戦後、アメリカ軍の病院に看護婦長として勤め、その後島の小学校の先生になり、死ぬまでその仕事を続けていた。また晩年には地区議会の議員もし

12 山下真史『中島敦とその時代』（双文社出版、2009）182頁。

13 閻瑜「中島敦の南洋物にみられるその時代意識－「マリヤン」を中心に」『大妻国文第45号』（大妻女子大学、2014）150頁。

14 須藤直人「太平洋の異人種間恋愛譚－植民地ロマンスとその「書き換え」－」『比較文学研究88号』（すずさわ書店、2006）37-58頁。

15 河路由佳『中島敦「マリヤン」とモデルのマリア・ギボン』（港の人、2014）61頁。

ていたそうである¹⁶」と指摘されている。そして、河路由佳は上田淳一郎の調査を受けて、さらに彼女の身内や知り合いを訪問し、「1932年日本三育女学校に2年間留学したことがある。何事も極めて優秀で、明るく自信に満ちた人で、その暖かい人柄で多くの人々に慕われていたようである¹⁷」と述べている。

このように、二氏の調査した結果、「マリヤン」に書かれた島民女マリヤンのプロフィールもエピソードも、実在したマリヤのものと思ってよいと言えよう。これらのマリヤンに関する事実情報は、作品の数多くの箇所「H氏に聞くと」「H氏は言っていた」「よく聞くと」「後でH氏に聞くと」と綴られていたように、土方久功から得たものであることに間違いはない。

中島敦の南洋日記にもその名前が確実に残されている。中島敦はパラオにいる間に、ほとんど毎日のように土方久功の家に出入りしていたので、その時マリヤと出会ったのであろう。日記でのマリヤに関する記述は以下の通りである。

夕方、土方氏宅にて島民料理を食う。

（中略）食後、島民の歌（日本語と土語と交れるもの）を皆で唱う。今日の料理はマリヤのご馳走なり¹⁸。

夜土方氏に到り、阿刀田氏高松氏等と飲み食い語る。十一時、外に出て一同マリヤを誘出し、月明に乗じコロール波止場に散歩す、プール際にて小憩。帰途初詣の人に会うこと多し、疲れて帰る¹⁹。

日記には、マリヤの名前が出るだけで、小説に書かれた彼女の容貌や性格などについては何も記されていない。「マリヤン」のH氏は土方久功がモデルであることは間違いがないが、これを読んだ土方久功は、「H氏は私とは違う」と言ったという²⁰。さらに上述の12月21日の日記に書かれた一同がマリヤを誘い出して散歩するエピソードは、小説にも生かされている。しかし、土方久功と＜私＞以外の人物は消されており、また日記に記されていない南洋神社初詣での話を加わったりするなど、作者が新たに作り出していたところが注目される。

つまり、マリヤン像は、土方久功から得たマリヤンに関する情報と実在するマリヤをモデルとしながら、中島敦自身の体験と彼の創意によって独自のマリヤン像に改められていたのであろう。次節では、こうした中島敦が描いた植民地南洋に生きるインテリ女性の生き方に注目する。

2. インテリ性質にこだわるマリヤン

「マリヤン」は、語り手の＜私＞がマリヤンという人物の名前、年齢、容貌を説明するところから始まる。

マリヤンの容貌が、島民の眼から見て美しいかどうか、これも私は知らない。醜いことだけはあるまいと思う。少しも日本がかったところがなく、また西洋がかったところも無い（中略）純然たるミクロネシア・カナカの典型的な顔だが、私はそれを大変立派だと思ふ。人種としての制限は仕方が無いが、その制限の中で考えれば、実にのびのびと屈託の無い豊かな顔だと思ふ。（中略）

豊かといえば、しかし、容貌よりも寧

16 上田淳一郎「三十年目の南洋群島」『中島敦研究』（筑摩書房、1978）281-289頁。

17 河路由佳、前掲書（註15）より参照。

18 1941年12月21日付日記。中島敦、前掲書（註8）488頁。

19 1941年12月31日付日記。中島敦、前掲書（註8）489頁。

20 河路由佳、前掲書（註15）51頁。

ろ、彼女の体格の方が一層豊かに違い無い。身長は五尺4寸を下るまいし、体重は少し痩せた時には二十貫といていた位である。全く、羨ましい位見事な身体であった²¹。（下線は筆者）

このように、作者は作品の冒頭でマリヤンの容貌について詳しく描写することによって、彼女の容貌に対する＜私＞の関心の強さを示している。しかも、＜私＞は彼女のその「純然たるミクロネシア・カナカの典型的な顔」と体格を、「大変立派」、「実にのびのびと屈託のない豊か」、「羨ましい位見事」だと好意的に描写している。

当時、南洋の島民には、チャモロ族とカナカ族に分けられていた。チャモロ族は石造の家で住み、服や靴などを着用している一方、カナカ族は床のある家を持ち、裸の格好が少なくなるのは大分その後の話である。また、チャモロ族はカナカ族とスペイン人およびフィリッピン人との混血だと言われ、生活の様式は欧風化し、容貌風姿も幾分カナカ族よりも優れているという²²。上述した情報からわかるのは、チャモロ族の混血した容貌はカナカ族のそれより立派だという事実である。

ところが、なぜ＜私＞はマリヤンの原始的な容貌に執着していたのだろうか。結論を先に言えば、中島敦自身の南洋行前に抱いていた南洋島民に対する認識が大きく関わっていると言える。

では、中島敦の南洋行以前の作品に描かれた南洋島民のイメージとは、いかなるものであったのか。中島敦は1936年に書き下ろした「狼疾

記」で、主人公の三造が南洋題材の映画を見ながら、考える場面がある。それは以下の通りである。

スクリーンの上では南洋土人の生活の実写が映されていた。目の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女たちが、腰にちよつと布片を捲いただけで、乳房をブラブラさせながら、前に置いた皿のようなものの中から、何かしきりにつまんで食べている。（下線は筆者）

スクリーンに映された南洋土人の姿から、当時中島敦の島民イメージが如何なるものなのかが垣間見られる。また「光と夢と風」（1941）の中においても類似する描き方が見える。

教育なき・力溢れる人々とともに闊歩し、明るい風と光との中で、労働に汗ばんだ皮膚のしたに血液の循環を快く感じ、人に笑われまいとの懸念を忘れて、真に思うことのみを言い、真に欲する事のみを行う。（中略）

欧羅巴の豚のような、文明のために去勢されてしまったもとは、全然違う。実に野生的で活力的で逞しく、美しいとさえ言っていいかもしれぬ²³。（下線は筆者）

以上引用した抜粋から窺えるのは、中島敦にとって南洋島民とは、「原始的」で、「教育なき・力溢れる」人々である。その中島敦によって造型された「マリヤン」の語り手の＜私＞がマリヤンの原始的なカナカ容貌に執着した所以である。

しかし、＜私＞の好意的な評価と対照的なのは、マリヤンは「自分のカナカ的な容貌を多少

21 中島敦「マリヤン」『中島敦全集1』（筑摩書房、2002）282-283頁。以下テキストの引用は頁のみ。

22 矢内原忠雄、前掲書（註5）14頁。小菅輝雄「南洋群島とはどんな所か」『南洋群島写真帖』（南洋群島協会、1978）。外務省条約局編『委任統治南洋群島 前編（「外地法制誌」第5部）』（外務省条約局法規課、1962）などを参照。

23 中島敦、前掲書（註21）107頁。

恥ずかしいと考えているようである」。それは、マリヤンがほかの島民と一緒に労働奉仕している時に＜私＞に見られた後の態度から見られる。その場面は以下の通りである。

窓から覗くと、すぐ側のバナナ畑の下草をマリヤンが刈り取っているのだ。（中略）色の褪せた、野郎仕事用のアッパッパに、島民並の裸足である。（中略）私を認めると、ニット笑ったが、別に話にも来ない。てれ隠しの様にわざと大きな掛け声を「ヨイショ」と掛けて、大籠を頭上に載せ、その儘さよならも言わずに向こうへ行ってしまった。（288頁）

＜私＞から見れば、島民姿はマリヤンの本来のままの姿である。しかし、＜私＞に見られた時のマリヤンは「てれ隠し」という態度と「さよならも言わずに」行ってしまう行動を取る人物である。これらの反応から、マリヤンは自分の島民姿を恥ずかしく感じており、できるだけそれを隠し、＜私＞に見られたくないというような心理が反映していることがわかる。では、一体なぜ彼女は自分の容貌や島民血統に対して恥ずかしく感じたのだろうか。

マリヤンがカナカ族の容貌を恥ずかしく感じた理由として、＜私＞は二つの解釈を挙げている。第一に「彼女はインテリであって、頭脳の内容はほとんどカナカではなくなっているからだ」、第二に現地では、「島民の間にあって、文明的な美の標準が巾をきかせているから」である。この2点について、詳しく考察してみたい。

マリヤンは原始的なカナカの容貌をしているが、＜私＞は彼女との交流の中で、マリヤンが「教育なき」、「なにも知らないで」いる純粋な島民イメージからかけ離れたインテリであることに気づく。

＜私＞が初めてマリヤンに出会ったのは、土俗学者H氏の部屋においてであった。マリヤンはH氏のパラオ語の先生である。前述した通り、H氏は土方久功のことで、彼はパラオ地方の古譚詩の類を集めて、それを邦訳している。それゆえにマリヤンが時々その作業を手伝いに来る。その日、二人は＜私＞をそばに置いてすぐに勉強を始めた。その勉強の様子を＜私＞は次のように語っている。

パラオには文字というものが無い。古譚詩は全てH氏が島々の故老に尋ねて歩いて、アルファベットを用いて筆記するのである。マリヤンはまず筆記されたパラオ古譚詩のノートを見て、そこに書かれたパラオ語の間違いを直す。それから、訳しつつあるH氏のそばにいて、H氏の時々の質問に答えるのである。「ほう、英語ができるのか」と私が感心すると、「そりゃ、得意なもんだよ。内地の女学校にいたんだものねえ」とH氏がマリヤンの方を見て笑いながら言った。マリヤンはちょっとてれたように厚い唇をほころばせたが、別にH氏の言葉を打ち消しもしない。（284頁、下線は筆者）

パラオは「文字というものが無い」ところである。しかしながら、マリヤンは英語も日本語もできるインテリである。＜私＞は「厚い唇」を持つ典型的なカナカ族の容貌をしているマリヤンが、「ほう、英語ができるのか」と非常に驚く。一方、マリヤンは＜私＞の感心やH氏の褒め言葉に対して「ちょっとてれたように厚い唇をほころばせたが、別にH氏の言葉を打ち消しもしない」。H氏に褒められた時のマリヤンは多少恥ずかしがるが、「H氏の言葉を打ち消しもしない」という行動から、彼女は自身の能力に自負心を持っていることが窺える。

後でH氏に聞くと、マリヤンの実母はコロールの第一長老の家の出である。パラオは母系制をとっているために、マリヤンはコロール島第一の名家の出身なのである。また、彼女の養父はパラオで相当に名の通ったインテリ混血児（英人と土人）である。英語ができるようになった背景にはこの養父の存在が大きい。そして、島民学校を出てから内地の女学校に進学していたため、日本語も内地人と変わらないほどの素養を持っている。

当時現地の教育では、「国語ヲ常用スル児童」と「国語ヲ常用ゼザル児童」を区別して日本移民の児童は小学校へ、現地住民の児童は島民学校（公学校）へと分けた。島民学校は三年制の本科と二年制の補習科がある。本科で優秀な学生は、補習科に進学し、大工徒弟養成所、実業学校といった専門教育を受けることができる²⁴。また、これら島民の卒業後の進路について、荒井利子は次のように指摘している。

パラオ人は、卒業後に運良く就職できて、事務職、通訳、家政婦、店員といった仕事ほとんどで、かなり優秀な生徒でも、村の巡警になるくらいだった。（中略）公学校三年間だけで卒業しても、日本人と接する機会が少なければ、日本語を使うこともなかった。また、補習科に進んでも、日本人のように漢字を使って書けるまでにはならなかったのだ²⁵。

上述した当時の教育事情を見れば、マリヤンは島民の中の優秀な島民よりも遥かに文明化され、教養が優れていることがわかる。マリヤンは相当な家柄と内地教育に恵まれたパラオでの僅かなインテリであることはいうまでもない。

＜私＞はマリヤンの家に一度訪ねたことがある。島民の家と全く変わらない一方、机の上には厨川白村の「英詩選釋」と岩波書店の「ロティの結婚」が置いてある。コロールには、「岩波文庫を扱っている店が一軒も無い」。ここにいる内地人でさえ、本を読む習慣も無い。だから＜私＞はマリヤンが「内地人をも含めてコロール第一の読書家かもしれない」と言う。また、その部屋の隅のみかん箱のような物の中にも、いろいろな書物や雑誌の類が詰め込んであり、その一番上には、女学校の古い校友会雑誌が載っていた。マリヤンはまだ日本での留学生活への懐かしさと未練を感じていることが窺える。

そして、マリヤンの友達も、どうも日本人ばかりのようである。夕方など、何時も内地人の商人の細君連の縁臺などに割り込んで話しているマリヤンは、大抵の場合、「その雑談の牛耳を執っているらしいのである。さらに、マリヤンはインテリであり、「頭脳の程度の相違」であるため、夫の島民男を2回も追い出したことがある。

上述したように、マリヤンはカナカの容貌を持ち、島民の間に生きていることは間違いないが、彼女の考えや精神はすでに他の島民たちとかなりかけ離れたところにいることはいうまでもない。彼女は留学して、本を読んで、日本語も英語も話せて、日本人の友達ばかり作って、内地人のような優れた能力を持ち、一所懸命頑張って日本人になろうとしていた。だからこそ、彼女は自分のカナカ人種の血統と容貌に恥ずかしく感じており、精一杯島民イメージから離れようとした。

つまり、＜私＞の目に映るマリヤンは自分の島民血統に劣等感を感じているほどインテリ性質にこだわり、一所懸命頑張って島民イメージから離れようとし、日本人になろうとしている姿である。このようなマリヤンの姿の背景に

24 荒井利子、前掲書（註3）136頁、能仲文夫『復刻版 南洋紀行 赤道を背にして』（南洋群島協会、1990）44頁を参照。

25 荒井利子、前掲書（註3）138-139頁。

は、当時の南洋社会の社会状況が深く関わっている。これは彼女が自分の容貌を恥ずかしく感じた第2の理由である。次節では、マリヤンが置かれるコロールという町の社会環境について見てみる。

3. 矛盾を孕む南洋社会

中島敦がパラオに赴任した1940年頃の南洋群島は、すでに多くの日本人移民がおり、制糖業、農漁業、鉱石採掘、通信業など様々な事業が展開されていた。言い換えれば、当時の南洋はもはや未開の島ではなかった。特に日本の南洋での最高統治機関南洋庁が置かれたコロールという町は、南洋では一番文明化が進んでいるところである。1940年頃のコロールについて、三田牧は次のように指摘している。

日本統治時代には南洋群島の首都機能がパラオのコロール島におかれたため、コロールには多くの日本人が住み、インフラ整備が進められた。日本人の人口は1938年にはパラオ人口6,377人に対し、日本人人口は15,669人である。（中略）

コロールの目抜き通り「本通り」はマンガの並木が美しく、商店が軒を並べていた。町の中心部には海軍の無線電信塔がそびえ立ち、病院や郵便局、公園、百貨店もあった。小高い丘の上には南洋庁長官邸があり、こざい官舎群がその周りに建っていた。「本通り」に並行する「芸者通り」には食堂や遊郭が立ち並んだ。もう一本の並行する通り「本願寺通り」には沖縄出身者が多く住み、三線の音色が聞こえたものだという。この日本人のために作られたような「町」コロールにおいて、もともとの住民であり地主であるパラオ人達は、日本人に埋もれるようにして暮らしてい

た²⁶。

このように、当時のコロールは島民よりほぼ2倍も多い日本人、整備されたインフラ、日本らしい近代的な町並みを持っている町であった。つまり、コロールは植民地支配によって内地と変わらない近代風の町に変貌していたのである。しかし、その一方、コロールは近代化されていたにもかかわらず、南洋の島民たちの生活は必ずしも豊かではなかった。彼らは自分たちの住む場所が日本人によって奪われ、日本人に埋もれるように生きるしかなかった。

実際、中島敦が滞在した時には、時局が逼迫するにつれて、それまで内地と周辺の島々から食料の補給を仰いできたコロール島も、いざという時に備えるためにできる限りの食料の自給を目指さざるを得なくなり、多くの土地が強制的に変えさせられた²⁷。この事態は中島敦の日記の中にも見られる。彼の9月10日付の日記には、「往昔の石畳路の掘起されて軍用道路となるを見る、島民また転居するもの多きが如く、（中略）椰子樹多く伐倒され、石畳変じて畑となる²⁸」と書き留めている。つまり、コロール町は近代化されたとはいえ、結局のところ、その近代化は日本移民のためであり、大多数の島民は近代化とは無縁な生活を送っていた。次の文は＜私＞がみたコロール町である。

実際、このコロールという町（中略）には、熱帯でありながら温帯の価値標準が中をきかせている所から生ずる一種の混乱があるように思われた。（中略）此处では、熱帯的のものも温帯的のものも共に美

26 三田牧「想起される植民地体験－「島民」と「皇民」を巡るパラオ人の語り－」『国立民族学博物館研究報告33（1）』（国立民族学博物館、2008）92頁。

27 岡谷公二『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』（富士房、2007）178-180頁。

28 1941年9月10日付日記。中島敦、前掲書（註8）464頁。

しく見えない、というより、全然、美というものが、——熱帯美も温帯美も共に——存在しないのだ。熱帯的な美を有つ筈のものも此処では温帯文明的な去勢を受けて萎びているし、温帯的な美を有つべき筈のものも熱帯的風土自然（特にこの陽光の強さ）の下に、不均合な弱々しさを呈するに過ぎない。（283頁、下線は筆者）

このように、コロールという町は、熱帯的価値観と温帯的価値観が混乱している場所であると＜私＞は認識する。

周知のように、南洋群島は17世紀初頭にスペイン、19世紀末にドイツの領有を経て、1914年日本海軍による占領の後、1919年ベルサイユ講和条約により日本の委任統治領となっていた。つまりここは、スペイン、ドイツ、そして日本の統治を受けていた複数の価値観を混淆しているところである。スペイン、ドイツ、日本を含め、早く近代化を成し遂げた文明社会での「温帯基準」は、南洋の昔ながらの「熱帯基準」にぶつかり、融和しながらもその社会の複雑さを広げていく。

「マリヤン」の中だけではなく、実際、中島敦は島々を巡る視察旅行中で、こうした複数の植民地統治の跡による混淆する社会に目を向けたのである。例えば、中島敦はヤルート滞在中、当地の大酋長カブアの家を訪れる時のことである。

午後は、（中略）カブアという大酋長の家をたづねた。ちょっとハイカラな洋風の家だ。（中略）酋長は三十位のおとなしい青年で、日本語も英語もできる。（中略）彼の細君が、非常な美人だ。色も内地人位。（中略）その細君の妹も出てきたが、これもキレイだ。二人とも日本人との混血

なんだ。（中略）この酋長の家の入り口に、標札がかけてあって「嘉坊」と書いてある。おかしいだろう²⁹？（下線は筆者）

洋風の家、日本語も英語もできる酋長、混血児と日本語の標札は、当時の南洋社会が「熱帯でありながら温帯の価値標準が巾をきかせている」混乱する様子を如実に描き出している。そして、「おかしいだろう」という言葉に象徴されているように、中島敦は南洋群島の風景に関心を持ちつつも、強い違和感を抱いていたことが窺える。

このような価値観混乱の現状と同じく、＜私＞は一生懸命インテリ性質を見せようとすればするほど、カナカ容貌が目立つマリヤンの身に起きている混乱と不調和を見た。その一つの例としては、彼女の家を訪ねた時に見た風景である。彼女の家は、他の島民たちの家と変わらなく、原始的な南洋風の家である。

天井に吊るされた棚には椰子バスケットが沢山並び、室内に張られた紐には簡単着の類が雑乱に掛けられ（中略）竹の床の下に雞共の鳴き声が聞こえる。（285頁）

ところが、その彼女の家には『ロテイの結婚』や『英詩選釈』など西洋文明を代表する本が置いてあったのである。＜私＞は「なんだか変な気がした。少々痛ましい気がしたといってもいいくらいである」と述べている。

マリヤンの身の上に起こっている不調和は彼女の家の風景だけではなく、彼女の盛装姿もまたそうである。「真白な洋装にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にした」彼女の姿は、＜私＞は「短い袖からは鬼をもひしぎそうな赤銅色の太い腕がたくましく出ており、園柱の如き脚

29 中島敦、前掲書（註8）605頁。

の下で、靴の細く高い踵が折れそうに見えた。そして、＜私＞は再び彼女の家の様子を見たときと同じような「可笑しさ」と「痛ましさ」を感じるのであった。

つまり、彼女は文明人を象徴する本や洋装を積極的に取り入れ、頑張って文明人になろうとしていたのである。しかし、彼女が文明人や内地人の側に立とうとすればするほど、原始的カナカの容貌に象徴される被植民者としての姿が敢えて目立ってしまい、矛盾も拡大していく。このように、＜私＞の目に映るマリヤンは、価値観が混乱する全く美しくないコロール町と同じく、ただ「可笑的」光景としか映らないのである。

4. 島民女のサンプル＜ララフ＞とインテリ女性＜マリヤン＞

前述したように、マリヤンの家を訪ねた＜私＞は、その原始的な南洋風の島民宅に『ロティの結婚』と『英詩選釈』を発見する。一見無造作に置かれていた書籍であるが、これらの書物は「マリヤン」を論じるにあたって、実に重要な意味を持っている。次の文はマリヤンが『ロティの結婚』について述べているところである。

其の「ロティの結婚」については、マリヤンは不満の意を漏らしていた。現実の南洋は決してこんなものではないという不満である。「昔の、それもポリネシアのことだから、よく分からないけれども、それでも、まさか、こんなことはないでしょう」といふ。（286頁）

このように、『ロティの結婚』が読めるインテリ女性マリヤンは、『ロティの結婚』について「現実の南洋は決してこんなものではない」と不満を言っている。なぜなら、彼女は書物に

描かれた南洋と現実の南洋との差異を知っているからである。では、『ロティの結婚』には南洋世界がどのように描かれているのか。

19世紀末イギリスの海軍少尉候補生ロティは、滞在先のタヒチでマオリ族の少女ララフと出会って結婚する。しかし、ロティは彼女を置いて帰国し、捨てられたララフは苦悩の末に命を落としてしまう。ララフは、ロティに対して深い愛情を持っているがあまりに舞踏会で別の女性と踊るロティに嫉妬し、彼をその場から無理やりに連れ出す。一方、ロティはララフとの結婚を一時的な結婚としか思っていない。彼はララフが別離に耐えられないと知りながら、彼女とタヒチから離れる。南洋でのロティの眼差しと感心が向けるところは、特定の女性との恋愛ないし結婚ではなく、現地人を観察するためであった。従って、ララフはタヒチ女性という枠組みの中ではほかの女性と置き換えられる存在に過ぎないということである。これについてカバ・加藤メレキは次のように指摘している。

作品全体において彼女（筆者：ララフ）はタヒチ文化や生活様式を体験・観察するための媒介となっている。テキストにはララフの内面描写が現れず、ただマオリ族を代表する身体として彼女のいわゆる特徴が分析されている。ララフはその民族の生活様式を具現化する人物として対象化され、それがゆえにロティの感心を惹いているのである。（中略）ロティの眼差しにおいてララフは、誰でもよいタヒチ女性のサンプルそのものである³⁰。

つまり、ララフは「誰でもよいタヒチ女性のサンプル」なのであった。ララフはロティに契

30 カバ・加藤 メレキ「ピエール・ロティ『ロティの結婚』—民俗学者的な眼差しとフランス領ポリネシア」『文学研究論集 28』（筑波大学比較・理論研究会、2010）57頁。

約結婚され、恋に落ち、ロティに捨てられた後も彼を愛し続けた。結局、彼女は寂しさのあまり乱れた生活を送ったあげくに死んでいったのである。このように、ララフはロティに尽くす女性として、自己を持たない存在として描かれている。

一方、マリヤンはこのような『ロティの結婚』に対して強い不満を抱く。これまで見てきたように、彼女はララフと違い、英語と日本語を勉強し、島民女性のイメージから離れようとするインテリ女性である。また植民地側の男性に翻弄される存在ではなく、積極的に植民地側に近づこうとする。つまり、マリヤンはララフのような南洋女性になることを拒否していることが、『ロティの結婚』に対する彼女の不満の言葉から明確に読み取るができるのである。

ところが、マリヤンは「現実の南洋は決してこんなものではない」と強く主張しながら、そのことを具体的に言わず、「決してこんなもの」「こんなこと」という抽象的な言葉でしか用いていない。同様の躊躇する姿は、内地人の男性との結婚に直面した際にも見られる。マリヤンが結婚相手のことを聞かれた時の場面を見よう。

大晦日の夜、H氏とマリヤンと＜私＞と三人は南洋神社に初詣をするために、コロールの波止場の方へ歩き、その先のプールに腰を下ろした。H氏はその場でオペラを歌い、マリヤンはフォスターの甘い曲を吹いている。＜私＞はそれを聴きながら、ふと、マリヤンが吹いているのが「元々北米の黒人共の哀しい歌」だったことを思い出す。そこでH氏はマリヤンに内地人との結婚話を持ちだした。

「マリヤン！マリヤン！（中略）マリヤンが今度お婿さんを貰ふんだったら、内地の人でなきゃ駄目だな。え？マリヤン！」

「フン」と厚い唇の端をちょっとゆがめ

たきり、マリヤンは返事をしないで、プールの面を眺めていた。（中略）暫くして、私が先刻のH氏の話のつづきを忘れてしまった頃、マリヤンが口を切った。

「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ。」

なんだ、此奴、やっぱり先刻からずっと、自分の将来の再婚のことを考えていたのかと、急に私はおかしくなって、大きな声で笑い出した。そうして、尚も笑ながら「やっぱり内地の男は、どうなんだい？え？」と聞いた。笑われたのに腹を立てたのか、マリヤンは外っぱを向いて、何も返辞をしなかった。（289頁）

マリヤンはH氏から内地人との結婚を進められると、その提案を断るのではなく、「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」と言っている。これは、彼女が内地人の男との結婚を本気で考えながらも、何かの事情で断念せざるを得ない事情を抱えているように受け取られる。＜私＞が「やっぱり内地の男は、どうなんだい？え？」と続けて質問をすると、彼女ははっきりした態度を見せず、ただ「外っぱを向いて、何も返辞をしなかった」のである。

H氏が考えたように、二度も離婚するなど結婚生活が幸福ではなかったマリヤンにとって内地人との結婚は、植民地統治層への参与が可能となり、島民男の夫との頭脳の違いも解消できる。しかし、マリヤンは南洋女性が植民地側に翻弄される存在であり、捨てられる運命から逃れたいと考えていたためだろうか。彼女は内地人との結婚を躊躇っている。

これまで見てきたように、マリヤンは内地人のように生きようと努力した結果、インテリ女性になった。しかし、彼女の中にはやはり一般島民女と同質な考えを持っていて、内地人との間に越えられない壁を痛感するのであった。

このように、内地人に劣らない素養と能力を持つインテリ女性マリヤンから、＜私＞は厚い唇を象徴するカナカ容貌を見出し、また「労働奉仕」の姿から彼女の被支配者としての一面を発見し、そして彼女の吹いている曲から「北米の黒人共の哀しい歌」を思い出す。やがて、＜私＞はマリヤンが内地人との結婚を断念する理由を知る。次の文は、H氏と＜私＞が一時内地へ出かけることになったことを伝えた時に彼女が示した反応である。

この春、偶然にもH氏と私とが揃って一時内地へ出かける事になった時、マリヤンは雞を潰して最後のパラオ料理をご馳走をしてくれた。

正月以来絶えて口にしなかった肉の味に舌鼓を打ちながら、H氏と私とが「いずれ又秋頃までには帰って来るよ」（本当に、二人ともその予定だったのだ）という、マリヤンが笑ながら言うのである。

「おじさんはそりゃ半分以上島民なんだから、又戻って来るでしょうけど、トンちゃん（中略）はねえ。」

「あてにならないというのかい？」と言えば、「内地の人といくら友達になっても、いぺん内地へ帰ったら二度と戻ってきた人はないんだものねえ」と珍しくしみじみと言った。（289-290頁）

マリヤンは、内地人にとって南洋は「二度と戻って」こない場所、つまり一時的な場所であると認識していた。だからこそ、彼女は内地人との結婚に一步を踏み出せなかったのである。

以上のように見てくると、マリヤンという人物は『ロテイの結婚』に描かれた内容に不満を漏らし、内地人の男との結婚を断念するなど、強い自我の持ち主でありながらも、内地人との間に立ちはだかっている厚い壁は永遠に越えら

れないものだと認識していたインテリ女性として描き出されている。

おわりに 南洋表象の中における＜マリヤン＞の存在

前述したように、中島敦が南洋群島に出かける前に持っていた想像上の南洋島民とは、「原始的」で、「教育なき・力溢れる」人々である。このようなイメージは、実は、ロテイ、スティブンソン、ゴーギャン、ランボーなど19世紀末の芸術家たちがもたらした「原始的国」「夢の国」といった南洋社会のイメージと同質なものである。しかも、彼らがもたらしたのは南洋社会のイメージだけではなく、『ロテイの結婚』や『ノア・ノア』に代表される＜南洋ロマンス＞でもあった。

これまで見てきたように、『ロテイの結婚』は、白人男性のロテイと、島民女性のララフとの恋愛と結婚を描いたものである。須藤直人が指摘しているように、『ロテイの結婚』に代表されるように、近代西洋は植民地人と被植民者とのロマンスを描く際に、常に白人男性と非白人女性との組み合わせを取り扱う。それは、＜愛情＞を通して＜支配＞し、後者の＜自発的な服従＞と＜文明の恩恵＞を主張して植民地支配を正当化・美化する西洋の植民地主義の言説であり、一種の植民地支配の構図である。しかしその一方、宗主国人の女性と植民地現地人の男性の組み合わせは、植民地支配に伴う不安、先住民に対する恐怖心の表徴であるため、隠蔽され、忌避されてきた³¹。

周知のように、日本は明治維新以来、「文明開化」というスローガンを掲げ、西洋文明を唯一の指標として目指し、西洋文明を無分別に吸収してきた。また、欧米列強と肩が並べられる

31 須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島－ポストコロニアル異人種間恋愛譚－」『立命館言語文化研究20（1）』（立命館大学国際言語文化研究所、2008）55頁。

文明先進国になるために、彼らを習って対外拡張し、戦争を起こし、台湾、朝鮮、南洋群島などの国を植民地にした。このような中で、白人男性と植民地現地人女性との結婚の構図も、そのまま白人男性＝内地人男性と現地人女性として模倣していた。そして、それは朝鮮の場合は内地人男性と朝鮮人娼婦（妓女）、南洋群島の場合はまさにゴーガン、ロテイ型の内地人男性と島民女との＜南洋ロマンス＞だった。

当時日本では＜南洋ロマンス＞を描く流行歌や小説が多く出版された。1920年代に入ってからには南洋の地名や風俗を歌詞に取り入れた大衆歌謡が登場し、そのうち1930年には「酋長の娘」が大ヒットした。この曲は、天祐丸に乗ってミクロネシアのトラック島に移住し、酋長の娘と結婚した内地人男性森小弁³²をモチーフにしたものである。

また、南洋を題材とした小説においても、こうした内地人男性と島民女のロマンスが描かれた。大久保康雄の「島妻」（『小説集 年輪 I』（妙齢会、1940））では、内地人男性と内地人男性に尽くす島民女が登場する。また、丸山義二の『帆船天祐丸』（万里閣、1941）では、内地人男性が土人の娘と結婚したのは「土人の娘を嫁にして、この島に根付くくらい覚悟があてこそ、はじめて、わが南方発展の実績があがるのだ」とされており、その結末では、「時はちやうど、第一回帝国議会が開かれたばかり、東京日比谷の原頭に、黎明日本の鐘が高らかに鳴り響いていた。天祐丸もまた、赤道直下の絶域に、南進日本の道標をうちたてたのである」と結ばれている。

そして、この島民女性のイメージはいうまでもなく、原始的な姿を有するカナカ女性に求め

られた。早くから帝展画家上野山は、紀行『写生地』（中央美術社、1926）の表紙に、南洋女性の裸体画を掲げ、また1933年には、「サイパンうしろにヤップ島 跳ねて出てくるカナカの娘 腰褭重ねてさらさらと あなたと住む島どれにしよ 年は十三恋を知る」という「カナカの娘」の歌が流行した。さらに能伸文夫は『南洋紀行 赤道を背にして』（中央情報社、1934）には「カナカの娘」を取り上げる自身が作詞した歌「憧れの南洋」が採用され、本文においても「カナカ女の情熱は魅力的」「カナカ娘と恋の立往生」などのタイトルが付けられ、「カナカの女」と内地人男性の恋物語が執筆されたことなどから、島民女のイメージを原始的なカナカ女性に求める日本の風潮が窺える。

つまり、当時の日本国内では、西洋文明の吸収によってもたらしたロテイやゴーガンの＜原始的＞、＜南洋ロマンス＞といった南洋表象が流行歌、絵画、文学作品などを通して広く伝えられ、そのまま再現されたのである。中島敦もロテイやゴーガンなどがもたらした南洋表象に深く影響された一人である。

中島敦は1937年に書かれた「歌でない歌」の中で「ある時はゴーガンのごとくたくましき野生のいのちにふればやと思う/ある時はスティブンソンが美しき夢に分け入り酔ひしれしこと」という二首の歌がある。また、1941年9月29日付の日記には次のような記述がある。

終日の饗宴の準備の後、夕暮、歌ひつれつつ花輪を手にのせる少女等が饗宴場に來り、一人一人、渠の頭に肩に花輪を掛けるといふ。さて焚火。石焼、料理のかぐはしき数々、など、スティブンソンやロテイの世界の如し³³。

32 主に南洋諸島のトラック諸島で活躍し、現地の女性と結婚したあと水曜島の大酋長も務めた人物。また、歌謡曲の『酋長の娘』や島田啓三の絵物語『冒険ダン吉』（講談社の雑誌『少年倶楽部』に連載された）のモデルとされている。具体的な人物紹介に関しては、荒井利子、前掲書（註3）をご参照ください。

33 中島敦、前掲書（註8）470頁。

さらに、1941年10月1日付妻たか宛の書簡には、「僕は今までの島でヤルートが一番好きだ。一番開けていないで、ステイブンスンの南洋に近いからだ³⁴」と記されている。これらの記述から明らかなように、中島敦の南洋行は、ステイブンスン、ロテイ、ゴーガンに深く影響されていることが窺える。そもそも彼は、ステイブンスンの＜サモア＞行やゴーガンの＜タヒチ＞行などを強く意識して、それらを自らの南洋行と重ね合わせようとする意向があったといえよう。本章で取り扱ったカナカ女性マリヤンを主人公にした「マリヤン」も、まさにロテイやゴーガンの＜南洋ロマンス＞を呼応するようなものにほかならなかった。

しかし、8ヶ月間の南洋滞在を通して、中島敦は自分の想像した世界とは全く異なる南洋の現実気づく。南洋は書物の中の原始的な楽園ではなく、熱帯的な価値観と温帯的な価値観が混淆する土地であった。また、マリヤンも簡単に＜南洋ロマンス＞に組み込まれる島民女ではなく、極めてインテリな頭脳を持つ女性であった。しかも、彼女は『ロテイの結婚』を読むことが可能な、そして「昔の、それもポリネシアのことだから、よく分からないけれども、それでも、まさか、こんなことはないでしょう」と『ロテイの結婚』に対して不満を漏らす女性である。さらに、彼女は「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」と内地人男性との結婚を断念する女性でもある。このような南洋女性は＜南洋ロマンス＞に描かれた植民地側の男性に尽くし、彼らに翻弄される存在としての島民女とは立場を異にしている。

南洋行後に執筆された「真昼」という作品の中で、中島敦は次のように自己省察するようになる。

お前は今、輝く海と空とを眺めていると思っている。あるいは島民と同じ目で眺めていると自惚れているのかもしれない。お前は実は、海も空も見てをりはせぬのだ。ただ空間の彼方に目を向けながら心の中で（中略）（見つかったぞ！何が？永遠が。陽と溶け合った海源が）と呪文のように繰り返しているだけなのだ。お前は島民をも見てをりはせぬ。ゴーガンの複製を見てをるだけだ。ミクロネシアを見てをるのでもない。ロテイとメルブイルの画いたポリネシアの色褪せた再現を見てをるに過ぎぬのだ。そんな青ざめた殻をくつつけている目で、何が永遠だ。哀れな奴め³⁵！

このように、中島敦は南洋や島民を見ている自分のまなざしが、実はロテイやゴーガンから借りたまなざしにほかならなかったことを痛切に反省している。南洋から帰った中島敦が、当時日本国内で広く認識されていた南洋表象とは一線を画す作品を次々と描き出したのは、このような自己反省があったことを私たちは見逃すわけにはいかないであろう。

参考文献

- 中島敦『中島敦全集1』（筑摩書房、2002）
中島敦『中島敦全集2』（筑摩書房、2001）
中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2001）
荒井利子『日本を愛した植民地 南洋パラオの真実』（新潮新書、2015）
上田淳一郎「三十年目の南洋群島」『中島敦研究』（筑摩書房、1978）
闊瑜「中島敦の南洋物にみられるその時代意識－「マリヤン」を中心に」『大妻国文第45号』（大妻女子大学、2014）

34 同上、607頁。

35 中島敦「真昼」、前掲書（註21）278-279頁。

岡谷公二『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』（富士房、2007）

外務省条約局編『委任統治南洋群島 前編（「外地法制読」第5部）』（外務省条約局法規課、1962）

カバ・加藤 メレキ「ピエール・ロティ『ロティの結婚』－民俗学者的な眼差しとフランス領ポリネシア」『文学研究論集28』（筑波大学比較・理論研究会、2010）

川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、1994）

河路由佳『中島敦「マリヤン」とモデルのマリア・ギボン』（港の人、2014）

久保喬『南洋旅行』（金の星社、1941）

小菅輝雄「南洋群島とはどんな所か」『南洋群島写真帖』（南洋群島協会、1978）。

須藤直人「太平洋の異人種間恋愛譚－植民地口

マンスとその「書き換え」－」『比較文学研究88号』（すずさわ書店、2006）

須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島－ポストコロニアル異人種間恋愛譚－」『立命館言語文化研究20（1）』（立命館大学国際言語文化研究所、2008）

能仲文夫『復刻版 南洋紀行 赤道を背にして』（南洋群島協会、1990）

松岡静雄『ミクロネシア民族誌』（岩波書店、1943）。

三田牧「想起される植民地体験－「島民」と「皇民」を巡るパラオ人の語り－」『国立民族学博物館研究報告33（1）』（国立民族学博物館、2008）

矢内原忠雄『南洋群島の研究』（岩波書店、1935）

山下真史『中島敦とその時代』（双文社出版、2009）